恋愛と消費の関係
～恋愛することで衝動買いが増えるのか～

石田比奈子[1],加計美月[2],神谷杏[3], 田中風舞[4], 三池親禄[5]

要約

本稿は、恋愛をすると衝動買いが増えるのかという疑問を解消することを目的としたものであり、私たちは「人々は恋愛をすることで放出されるドーパミンの効果により、衝動買いをしてしまうのではないか」という仮説を立てた。今回私たちは、Google フォームを用いたアンケート調査を行い、主に「恋愛をしているか」と「最近の消費行動」について質問した。その結果をもとに、恋愛をしていて、かつドーパミンが分泌されている人を対象とし、恋愛と消費行動に関係があるのかを分析した。恋している人と恋していない人の全体的な消費金額に差があるのかについて t 検定を行ったところ、恋している人の方が恋していない人よりも消費金額が多いことがわかった。また、恋している人の中で普通財の消費金額と恋愛財の消費金額の相関を調べたところ、中程度の正の相関が見られた。正の相関が見られたことで恋をしていると予算制約に反した非合理的な消費行動をとっている可能性が示された。

JEL 分類番号：D91,D21,D71

キーワード：恋愛,衝動買い,消費行動,購買意欲

[1] 石田比奈子　同志社大学経済学部　cged0194@mail3.doshisha.ac.jp

[2] 加計美月　同志社大学経済学部　cged0240@mail3.doshisha.ac.jp

[3] 神谷杏　同志社大学経済学部　cged0246@mail3.doshisha.ac.jp

[4] 田中風舞　同志社大学経済学部　cged0764@mail3.doshisha.ac.jp

[5] 三池親禄　同志社大学経済学部　cged0420@mail3.doshisha.ac.jp

1.イントロダクション

1.1　研究の背景と目的

本稿は、「恋愛をすると衝動買いが増える」という仮説について分析することを目的とするものである。衝動買いとは、「買う予定でなかった不要不急の品物を、その場で気に入って買ってしまうこと。」（林（1962））と定義されている。衝動買いには、脳の中で出ているドーパミンが関与しており、一般的にドーパミンが分泌されるという恋愛と衝動買いには関係があるのでないかと考察した。従来の経済学では、人々は予算制約線上でのみ消費行動をとると言われてきた。それが恋愛によって覆されるのかという疑問をアンケート調査の結果から分析していく。

1.2　仮説

私達は、人々は恋愛をすることで放出されるドーパミンの効果により、衝動買いをしてしまうのではないかと考えた。つまり、恋愛をすることで、恋愛財の消費が増えるのに加え、普通財の消費も増えるのではないかと仮説を立てた。ここで、経済合理人（エコノ）の場合、予算を一定としたとき、恋愛財の消費が増えれば普通財の消費を減らすという行動が考えられる。

ここでの恋愛財とは、化粧品や基礎化粧品のように、本来必須ではないが他人からの印象を良くするために購入したものなど、本人が恋愛のためであると自覚している財であると定義する。また、普通財は、個人的な趣味や生活に必要なものなど、恋愛とは関連が薄い財であると定義する。

2.1　アンケート調査

今回、私たちはＧｏｏｇｌｅフォームを使用してアンケート調査を行った。アンケートの回答数は 125 件（男性 51 件・女性 74 件）であり、年齢層は 15～25 歳である。

アンケート内容は大きく分けて以下の通りである。

・現在、恋愛をしているか判別するための質問
・その人の恋愛傾向に関する質問（相手に尽くすタイプか、尽くされるタイプかなど）
・直近１ヶ月の恋愛に関する財への出費の変化量
・直近１ヶ月の恋愛とは関連の薄い財への出費の変化量
・アンケートの目的を被験者に気づかれないためのダミーの質問

2.2　分析

アンケートで「恋人がいる」「好きな人がいる」と回答した上で、「食欲不振」「倦怠感」「情緒不安定」「集中力の欠如」「モチベーションが高い」という 5 つの項目についてどれか一つでも当てはまった人を「恋している人」とした。上記の 5 つの項目は、いずれも恋をしたことで放出されたドーパミンによって起こる症状である。ドーパミンは、記憶や意欲に関連する神経伝達物質であり、これが放出されると「モチベーションの向上」が見られる。また、神経性食欲不振症とドーパミンの過剰産生とに関連が見られることから、ドーパミンが通常より多く放出されると「食欲不振」を引き起こす可能性が考えられる。そして、ドーパミンは炎症性サイトカインとの関係から、「倦怠感」症状にも影響があることがわかっている。さらに、ドーパミンは ADHD に

も関連していることから、通常より多く放出されると「情緒不安定」になると考えられる。加えて、ドーパミンは統合失調症の原因とされており、その症状として情報過多による「集中力の欠如」が挙げられる。

そして「恋人がいる」「好きな人がいる」と回答した上で、上記の 5 項目のいずれにも当てはまらなかった人と、「恋人も好きな人もいない」と回答した人を「恋していない人」とした。また、「メイク道具」「基礎化粧品」「洋服」「靴」「外食」「ジュース」「お酒」「本・漫画・雑誌」「文房具」「インテリア雑貨」「その他雑貨」「プレゼント」という 12 個の財について質問をおこなった。12 個の財について、以前と比べて 8 月の消費金額が「増えた」か、「変わらない」か、「減った」かで回答してもらい、それぞれ順に「+1」、「0」、「−1」と得点をつけた。また、いずれの財においても、その財を消費した目的が「恋愛のため」か、「自分のため」か、「それ以外の目的」かを質問した。この 2 つの質問では前者２つの項目を選択した場合を「恋愛財」、「普通財」とした。「それ以外の目的」を選択した場合は、今回の分析には関係ないものとして除外した。「メイク道具」と「基礎化粧品」については、もともと使用していない人もいると考えたため、「使用していない」という選択肢も設けた。そのため、「使用していない」と回答された財についても除外した。また、引っ越しを行うと新生活のために消費量が増えると考えたため、直近３ヶ月で引っ越しを行った人も分析対象から除外した。

ここで、「恋愛をすると衝動買いが増える」という仮説から、恋をしている人の方が恋をしていない人に比べて総合的な消費金額が増加すると考えられる。また、恋をすることで恋愛財が増加することは想定できるが、衝動買いをするならば、普通財が変わらない、または増加している場合に恋愛財も増加すると予測できる。普通財についても同様に、恋をしていると恋愛財が変わらない、または増加した場合に普通財も増加すると予測できる。

まず、恋している人と恋していない人の全体的な消費金額に差があるのかについてアンケートで質問した 12 個の財のポイントを足し合わせ、それを財の個数で割り、財ひとつあたりのポイントを算出した。この、財ひとつあたりのポイント数の平均値は、恋している人が 0.006 ポイント、恋していない人が-0.099 ポイントであった。平均値に統計的に有意な差があるかを調べるために、対応のない t 検定を行ったところ、この平均値差は 5%水準で有意であった。$t(118)=2.201$、$p=.038$、$d=0.415$。以上より、恋している人の方が恋していない人よりも消費金額が多いことがわかった。

次に、恋している人と恋していない人の普通財の消費金額に差があるのかについて、普通財に該当する財のポイントを足し合わせ、それを個人ごとに該当した財の個数で割り、普通財ひとつあたりのポイントを出した。その際、恋愛財が減ったと回答した人については除外した。この普通財ひとつあたりのポイント数の平均値は、恋している人が 0.241 ポイント、恋していない人が 0.104 ポイントであった。平均値に統計的に有意な差があるかを調べるために、対応のない t 検定を行ったところ、この平均値差は 5%水準で有意でなかった（$t(109)=0.112$）。

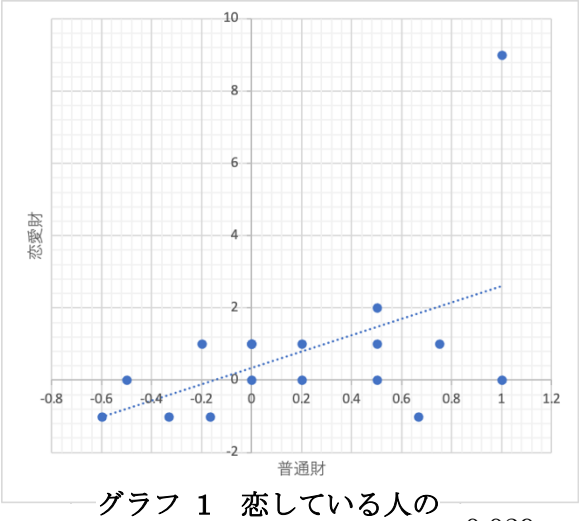
これについて男性のみ、女性のみでも同様に t 検定を行ったが、有意差は見られなかった。

男性のみの場合、この普通財ひとつあたりのポイント数の平均値は、恋している人が 0.688 ポイント、恋していない人が 0.793 ポイントであった。平均値に統計的に有意な差があるかを調べるために、対応のない t 検定を行ったところ、この平均値差は 5%水準で有意でなかった（t(43)=-0.019)。女性のみの場合、この普通財ひとつあたりのポイント数の平均値は、恋している人が 0.239 ポイント、恋していない人が 0.027 ポイントであった。平均値に統計的に有意な差があるかを調べるために、対応のない t 検定を行ったところ、この平均値差は 5%水準で有意でなかった（t(63)=0.767)。

また、恋している人と恋していない人の恋愛財の消費金額に差があるのかについて、恋愛財に該当する財のポイントを足し合わせ、それを個人ごとに該当した財の個数で割り、恋愛財ひとつあたりのポイントを出した。その際、普通財が減ったと回答した人については除外した。この恋愛財ひとつあたりのポイント数の平均値は、恋している人が 0.171 ポイント、恋していない人が 0.019 ポイントであった。平均値に統計的に有意な差があるかを調べるために、対応のない t 検定を行ったところ、この平均値差は 5%水準で有意でなかった（t(86)=1.620)。

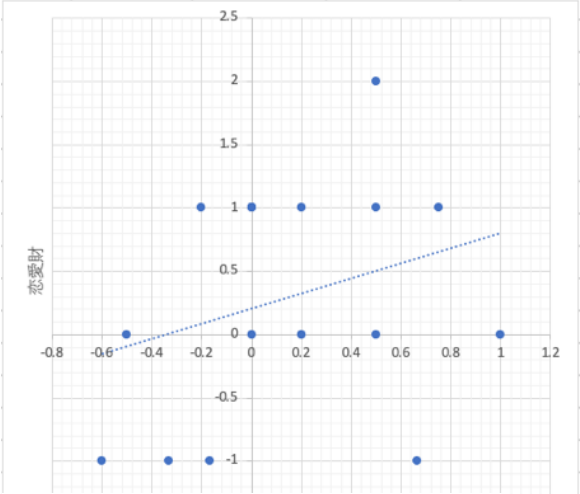
これについて男性のみ、女性のみでも同様に t 検定を行ったが、有意差は見られなかった。男性のみの場合、この普通財ひとつあたりのポイント数の平均値は、恋している人が 0.786 ポイント、恋していない人が 0.000 ポイントであった。平均値に統計的に有意な差があるかを調べるために、対応のない t 検定を行ったところ、この平均値差は 5%水準で有意でなかった（t(35)=1.455)。女性のみの場合、この普通財ひとつあたりのポイント数の平均値は、恋している人が 0.273 ポイント、恋していない人が 0.000 ポイントであった。平均値に統計的に有意な差があるかを調べるために、対応のない t 検定を行ったところ、この平均値差は 5%水準で有意でなかった（t(49)=1.667)。

最後に、恋愛財と普通財の間で相関係数分析を行った。恋している人の中で普通財の消費金額と恋愛財の消費金額の相関を調べたところ、相関係数は r=0.489 であり、中程度の正の相関が見られた。（グラフ１）また、P 値が 0.039 を取ることから、この相関係数は有意である。エコノであれば予算制約があるため、どちらか一方が増加すればもう一方が減少するはずである。しかし、正の相関が見られたので恋をしていると予算制約に反した非合理的な消費行動をとっていると考えられる。ここで、グラフ１から外れ値の存在が確認できるため、外れ値を除いた相関も求めた。外れ値を除いた場合の相関係数は、r=0.293 であり、弱い正の相関が見られた。（グラフ２）しかし、P 値が 0.254 を取ることから、この相関係数は有意でなかった。



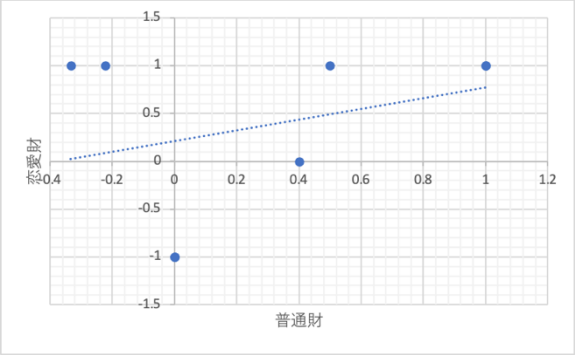
グラフ 1　恋している人の　　p=0.039
相関

また、恋していない人の中で普通財の消費金額と恋愛財の消費金額の相関を調べたところ、相関係数は r=0.320 であり、弱い正の相関が見られた。（グラフ３）しかし、P 値が 0.440 を取ることから、この相関係数は有意でなかった。また、グラフ３からこれは線形の相関ではない可能性が高い。



グラフ 2　恋している人の相関（外れ値を除外）

r=0.293、p=0.254



グラフ 3　恋していない人の相関 ）

2.3　アンケート結果の考察と今後の展望

以上より、恋をしていると普通財と恋愛財の消費金額の増減に中程度の正の相関が見られたため、恋をしていると予算制約を無視した非合理的な消費行動をとっていたと考えられる。また、恋している人は恋していない人よりも全体的な消費金額が多かった。そのため、恋をしている人の方がより非合理な衝動買いを行っている可能性がある。しかし、目的別の分析では恋している人と恋していない人で有意差が見られなかったが、仮説を部分的に検証することができた。

今回の分析と結果を踏まえ、今後の展望として、質問の内容を変えアンケートを取り直すことを検討している。

〈付録〉

アンケート

https://forms.office.com/r/89ByRQyP6z

〈参考文献・引用文献〉

U.F.Bailer, G.K.Frank, J.C.Price, C.C.Meltzer, C.Becker, C. A.Mathis, A.Wagner, N. C.Barbarich-Marsteller, C.S.Bloss, K.Putnam, N.J.Schork, A.Gamst and W.H.Kaye, 2012. Interaction between serotonin transporter and dopamine D2/D3 receptor radioligand

measures is associated with harm avoidant symptoms in anorexia and bulimia nervosa.
https://www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/S0925492712001539

J.M. Beaulieu and R.R.Gainetdinov, 2011. The Physiology, Signaling, and Pharmacology of Dopamine Receptors.
https://web.math.princeton.edu/~sswang/basal-ganglia/Pharmacol%20Rev-2011-Beaulieu-182-217-dopamine-receptors.pdf

J.C.Felger and A.H.Miller, 2012. Cytokine effects on the basal ganglia and dopamine function: The subcortical source of inflammatory malaise.
https://www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/S0091302212000416

林周二，1962．流通革命―製品・経路および消費者．中央公論新社．日本.

石井裕明，2009．消費者視点の衝動購買研究．マーケティングジャーナ　Vol.29，No.1.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/marketing/29/1/29_2009.034/_pdf/-char/ja

西川一二(関西大学大学院心理学研究科)，2012．特性好奇心における wanting 傾向と linking 傾向　－質問紙による個人差の測定－．日本心理学会第 76 回大会発表論文集，921.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/pacjpa/76/0/76_1PMD04/_pdf/-char/ja

小田晋，作田明，2006．心の病の現在３　うつ病　統合失調症．新書館，日本.

理化学研究所，大阪市立大学，ロンドン大学，2015．恋愛中にドーパミン神経が活性化する脳領域を解明 －恋人を見てドキドキすると、前頭葉の２つの領域が活性化する－.
https://www.osaka-cu.ac.jp/ja/news/pdfs/press_150514.pdf

J.M.Swanson, P.Flodman, J.Kennedy, M.A.Spence, R.Moyzis, S.Schuck, M.Murias, J.Moriarity, C.Barr, M.Smith and M.Posner, 2000. Dopamine genes and ADHD.
https://www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/S0149763499000627